IV-26 進展せる後腹膜横紋筋肉腫（embryonal type）
の長期生存例

小林 孝明*，高崎 育男*，岡部 郁夫*，森田 建*

横紋筋肉腫は小児期に好発する悪性軟部組織腫瘍の一つであるが、その発生は比較的稀であり、とりわけ後腹膜領域の原発は少なく、その予後も頭頸部や四肢のものより悪い。教室では、後腹膜より発生し、初回治療より4年6ヵ月を経た現在、再発、転移の巻くなく生存している進展症例を経験した。

症例：9歳2ヵ月、男児、2ヵ月前より運動後、下腹部痛、頻尿あり、某医にて腹痛炎の診断にて加療するも軽快せず、腹部全体に及ぶ成人頭大の腫瘍に気付き当科に転院。超音波検査ではirregular pattern、血管造影にても悪性腫瘍の所見であった。しかし尿中VMA、血清AFP値は正常範囲、骨髄検査でも正常像を示した。入院3日目、腫瘍による腸管や尿路の通過障害のため緊急手術を施行、腫瘍は骨盤腔を含めた腹部全体に及び、膀胱や腸管を圧排、両側尿管をも巻きこみ、さらに小腸管、腸骨間膜、大網への播種性転移が認められたので、剔除困難と考え、生検と左

横行結腸に人工肛門及び両側尿管膿を造設したにとどまった。術後60Co照射1,750 rads、AMDとVCRの投与により、腫瘍の縮小をみたので3ヵ月後second look operationを行なった。腫瘍の原発は後腹膜骨盤部であり、亜全剔除しえた。剔除腫瘍は16×11×8 cm大、重量650 gであった。組織型はembryonal typeで、病期はIntergroup Rhabdomyosarcoma StudyによればGroup IV。National Cancer Institute of the United StateによるClininal StagingはSTAGE III Aに相当する進展例であった。術後さらに60Co照射を2,400 rads追加し、化学療法（AMDとVCR）は3年3ヵ月の長期にわたり交互に投与した。その後2年7ヵ月目に人工肛門を閉鎖し、4年6ヵ月の現在、再発、転移の巻くなく健在である。なお近日常に尿管再建術を考慮中である。本症の術後は診断時年齢、腫瘍の発生部位、症期、組織型、初期治療方法に関与するといわれている。教室例は、そのすべてからみて治療困難と考えられたが、長期生存しているので報告した。